九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

20世紀後半におけるウィリアム・ゴールディングと読むことの意味

宮原，一成

https://doi.org/10.15017/1485070

出版情報：九州大学，2014，博士（文学），論文博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

宮原　一成（英語学・英文学）

20世紀後半におけるウィリアム・ゴールディングと読むことの意味

論文審査の結果の要旨

上記の論文は、英国人作家ウィリアム・ゴールディング（1911-1993）が、20世紀後半に盛んになった、作品解釈における作者の権威を否定し読者の解釈を重視する思潮に対しどのような態度を取っていたかを、作品の詳細な分析を通して解明したものである。本論文はまず序章で、インタヴューや講演での発言をもとに、ゴールディングが1954年のデビュー以来、最初は作品解釈における作者の権威を強く信じていたものの、1959年に『自由落下』で酷評を受けた後、その信念がぐらつき、作者の意図の権威の否定と肯定の間で微妙に揺れ動き続けたことを確認する。そのことを踏まえた上で、本論文は第一部から第三部の構成で、ゴールディングの作家像を考察する。

第一部は、ゴールディングが作者の意図の権威を確信していた時期の『蝿の王』(1954)、『ピンチャー・マーティン』（1956)、『後継者たち』（1955）を取り上げ、順に一つの章を割いて取り上げる。作者の意図の権威の確信は、『蝿の王』ではその結末近く、主人公の少年ラルフの視点に叙述を集中して、その後急に視点を拡張する転換に典型的に見られる。第一章の考察は、その転換に作者による読者に対する強力な操作を見て取り、かつ、その転換がラルフと彼の視点を理解できない大人達との断絶を際立たせるもの捉える。こうした作者による読者に対する強力な操作は、作品がその意識を叙述してきた主人公が既に死んでいたことをどんでん返しのように結末で提示する『ピンチャー・マーティン』、ネアンデルタール人と新しい人類の双方の獣性を悟るよう読者を強力に誘導する『後継者たち』でも見られることを、本論文は綿密に解き明かし、それぞれの作品について新たな、説得力ある解釈を提示する。

第二部は、『尖塔』（1961)、『ペーパー・メン』（1984)、『通過儀礼』（1980)、『通過儀礼』を第一作として含む『海洋三部作』（1991)、『可視の闇』（1971）のそれぞれを第四章から第八章で考察する。これらの作品はいずれも、ゴールディングが作者の意図の権威について確信がぐらついた後に創作されたが、本論文はゴールディングが作者の意図の権威への確信のぐらつきにも拘わらず、作品の意味の決定者としての読者の地位を相対化するように、作品中で読者に自分の読みの確実さを反省させるよう誘導していることを、数多くの非常に独創的な着眼、考察を織り込みながら解き明かす。例えば第四章は、『尖塔』において「読み」が作品の重要な主題となっていることを詳細な分析によって明らかにし、かつ、読者の地位を主張する理論では作者から解放されたはずの「読者」が、自らの解釈共同体が課する拘束に縛られていることを作品が描き出していることを指摘する。

第三部は、第九章で『蝿の王』を再び取り上げ、ビルという少年に関する描写の矛盾に注目し、ゴールディング自身も意図せずに露呈させたと考えられる自身の迷いを指摘し、一定の方向性に拘束されない読みがもたらす可能性を示唆する。第十章は『自由落下』が主人公が自らの回心の物語を構築しようとしながら、作品の結末でその物語が急に崩壊させられていることを詳細に分析し、「書き手」も「読み手」も自らの書く行為、読む行為に対する全面的な否定を経験させられるとする。しかし、結びの第十一章では、そうした否定が解放をももたらし、新たな探求を可能にするのであり、そうした解放と探求の場に身を置くことの追体験がゴールディングを読むことの意味であるとする。

読者の地位を称揚する理論への反応という視点はゴールディング研究においてきわめて独創性があり、しかも、本論文のこの視点は作品と作家像に非常に意義深い解明をもたらしていると評価できる。

以上のことから、本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに相応しいと認めるものである。